

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 博物館で動物の剥製を見る。
- (2) 討論会は苛烈を極めた。
- (3) 文集の装丁に趣向を凝らす。
- (4) 季節では春が殊に好きだ。
- (5) 行事の成功のために東奔西走した。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 国内クツシの観光地を訪れる。
- (2) リンリツする都心のビルに圧倒された。
- (3) 実験でキハツセイの高い液体を扱う。
- (4) 生徒会長の演説を、生徒たちはナリを潜めて聞き入った。
- (5) 物事は即決せず、サンシコウコウした方がいい場合もある。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

小市航太は高校三年生である。偶然、同学年の河野が、創作俳句を競う「俳句甲子園」出場を目指していることを知る。航太は河野にメンバー集めの手伝いをさせられるが、難航していた。二年生の斎和彦の紹介で、短歌をたしなむ、二年生の来島京を勧誘するが、京は俳句を「不完全なもの」と言い、誘いを断っていた。

翌日の放課後。文芸部の部屋には四人が集まった。

航太と河野女史*。机を挟んで来島京、その横には斎和彦もいた。

「すみません、ぼくも、結末まで見せてもらってもいいですか。面白そうなんで。」

「どうぞどうぞ。おれもやじうまだから。」

航太は気軽に答えてから、あわててつけ足した。「あ、来島さんがそれでいいのなら。」

来島京は、硬い顔のまま無言でうなずく。

河野女史が二枚の紙を取り出して、裏向きのまま机に並べた。

「本当は手書きのほうがいいのかもしれないけど、私、字が下手なので、悪筆を見せたらかえって来島さんの歌のよさが損なわれそうなので、ワープロ打ちしてプリントアウトしてきた。」

河野女史はそう言うのと、まず一枚を表に返して、来島京の前に滑らせた。

A 迷ふ日々涙して立ちすくむ日々

すべて愛しき日々年終はる

「来島さん、この歌で間違いない？」

来島京は、またうなずいた。

「昨日も言ったけど、この歌を選ばせてもらったのは、私が、すごく好きだから。迷うことも泣くことも立ちすくんで動けなくなることも、みんな無駄じゃない、そういう日々ばかりだったけど、それでもその一年がいてほしい。なんだか、この歌を読んで涙が出そうになったよ。それで……。」

「早くしてもらっていいですか。」

河野女史の熱弁を、来島京は表情のない声でそうさえぎった。

「あ、ごめん。この期に及んで、くどくど言っちゃいけないかった。」

(1) 河野女史は、もう一枚の紙に手をかけると、大きく一呼吸して、それからさっと表向きにした。

真っ白な紙に、たった一行。

意味をわろうと意識するまでもなく、すべての文字が航太の目に飛び込んでくる。

B 迷ふ泣く立ちすくむまた日記買ふ

その文字が耳の中で響く。二回三回、こだまする。

「来島さん。私、短歌と同じ心を俳句で詠むことができるかと昨日言った。でもそれは、ただ言葉を削ることじゃない。来島さんの歌、自分が悩んでもがいていた時間を本当に大事に思っている。その思いを噛みしめていることが、『日々』という言葉を繰り返すことで伝わってくる。でも、そういうリフレインは、俳句ではあんまり使えない。何と言っても、俳句は短いから。」

「だったら……。」

思わずというふうに来島京が言いかけて、それからやめた。河野女史

があとを引き取った。

「だったら、やっぱり俳句は短歌の代わりにはなれないんじゃないかって？」

「そ、そうです。」

河野女史は大きくうなずいた。

「そう。厳密に言ったら、そうかもしれない。だからね、この言葉を使った。」

「あ！『日記』？」

航太はそこで思わず叫んでしまい、ほかの三人の視線を浴びて体を縮めた。

「悪い、つい……。」

「ううん、そういうことなんだ、小市。」

河野女史の声が熱を帯びてきた。

「それから、『愛しき』という言葉。悩んだ日々も動けない日々も、愛しい。その気持ちはよくわかるけど、でも俳句では、『愛しい』とか、そういう感情を直接出す言葉はあまり使わない。だからと言ってそういう思いを詠めないわけではない。日々がいてほしい、そう歌う代わりに、その思いは日記を書くという行為に込めることができると思う。」

航太の脳裏に、買い込んだばかりのかわいらしい日記帳を抱きしめて毅然と歩く河野女史の姿が、浮かんできた。

「日記を書くのは、自分の過去を大切にすることから。愛しく思うから。たとえそれが楽しいだけの毎日じゃなくても、つらいと泣いた日々でも。きつとこれからだってそういう日々は続く、でもそれも全部自分のものだと受け止めよう。そのために、私はまた日記を買う。私が一番工夫したのは『また』の二音。この言葉で、過去の行動を肯定しているからこそ未来にも繰り返す、それを表現したつもり。これが俳句の表し方。来島さん、俳句の技法は短歌とは違う。でも、俳句で自分の感情や思いを表せないということは、絶対に、ない。」

来島京の反応を窺^{うかが}った航太は、あわてた。彼女の目が赤いのだ。
「だ、大丈夫？」

来島京は顔をそむける。航太は彼女が目をこするのを見ないようにした。一方、のほほんとした姿勢をくずさない男が一人いる。

「あのおう、ちょっと質問いいですか？ 河野先輩。」

「はい、斎君、何？」

「河野先輩の説明、すごく面白かったんだけど、ちょっと気になったんです。俳句って、基本、季語を入れなければいけないんですよね？」

航太は内心あつと叫んだ。そうだ、すっかり忘れていたが、そのとおりだ。昨日恵^{けい}も言っていたじゃないか。

「それと来島さんの歌は、最後の『年終はる』で、一年を振り返っての感慨だということを表してますよね？ そこんところ触れられてない気がするんだけど、いいんですか？」

斎和彦の質問に、河野女史は落ち着いて答える。

「そうよね。そこもちょっと苦心した。実は、歳時記を結構ひっくり返して調べたんだ。」

「歳時記なんて持ってるんだ、河野女史。」

航太が口を挟むと、たしなめられた。

「当たり前。昨日もこの部屋を出たあと、すぐにお世話になった。」

「ああ、昨日見ていた辞書みたいなの、あれ、歳時記なんだ。」

「小市と話していると脱力するよ。私たち、五木^{いづき}中学校卒業の時に、全員卒業記念品として学校からもらったでしょ。斎君たちもそうだったんじゃない？」

河野女史がそう言って二年生二人の顔を交互に見ると、斎和彦が穏やかに答えた。

「そうでしたかね……。ところで河野先輩、さっきのぼくの質問ですけど。」

三人の目がまた自分に集まったのを見て、河野女史は改めて説明を再開した。

「実は、『日記買ふ』が季語。」

「へ？」

叫んだのは、たぶん男二人だ。

「季語って草や花の名前とか、自然のものじゃないのか？」

「いや、入学式とかクリスマスとかも季語だったはずですよ。」

言い合う横で、河野女史が、我が意を得たりという顔でにつこりする。

「そう。それで、日記を買うのは、普通……。」

⁽²⁾男二人の呆然^{ぼうぜん}とした声が、またそろそろ。

「年末か！」

すごい。航太は今度こそ感心した。

また日記買ふ。

たったその七音に、自分の過去、これからの未来、どっちも受け入れれる思いと、年の瀬の空気や新しい年への期待、それをみんな盛り込むのか。

さっきの、日記を買い込んだ河野女史の姿が、今度は首にマフラーを巻きつけている。去年見た、ピンクのチェック。あ、コートも着ている。ベージュのダッフルコート。弾んだ足取りで店を出た河野女史のやわらかい髪が、そのフードの上で揺れている。傾いた冬の日、風は冷たそうだ。来年はどんなことがあるだろう……。

そこで航太は我に返った。

——やばい、ここまで勝手に想像をふくらませたら、完全に妄想じゃないか。

航太に自分の姿をありありと映像化されていたのも知らず、河野女史は来島京しか見ていない。

「どう？ 来島さん。俳句をやってみてくれないかな？」

赤い目のままで、来島京がうなずいた。即座に、河野女史がその肩をぽんとたたく。

「じゃ、あとで俳句甲子園の説明プリント、持ってくるからね。」

「はい。」

顔を上げた来島京は、表情がやわらかくなっている気がした。

——ふうん。

⁽³⁾ 航太は感心する。

——河野女史、結構リーダーシップがあるのかもしれない。

ヤマアラシみたいに警戒心むき出しだった女の子を＊かいじやう懐柔できたのだから。

そして、俳句甲子園のメンバーを一人確保できたわけだ。

(森谷明子「南風吹く」みなみによる)

〔注〕女史——学問や地位のある女性を敬って使う敬称。

恵一——航太の友人。

懐柔——巧みに味方に引き入れること。

〔問1〕⁽¹⁾ 河野女史は、もう一枚の紙に手をかけると、大きく一呼吸し

て、それからさつと表向きにした。とあるが、「河野女史」が「大

きく一呼吸し」たのはなぜか。その理由として最も適切なものは、

次のうちではどれか。

ア 来島京が作った短歌を俳句に書き換えることで、京自身が気付いていなかった本心に気付かせることができるか不安を感じたため。

イ 来島京が作った短歌を書き換えた自分の俳句で、俳句のもつ力や可能性を京に納得させるための説明をする覚悟を決めたため。

ウ 来島京が作った短歌を書き換えた自分の俳句が、京自身が表現しきれなかった世界観を膨らませられた喜びを落着かせたため。

エ 来島京が作った短歌を書き換えた俳句のできればに興奮して言葉数が多くなったことを京に指摘され、気をもんだため。

〔問2〕 Bの俳句を作る際に、「河野女史」が「また日記買ふ」に込め

た思いはどのようなものか。その説明として適当でないものを、

次のうちから一つ選べ。

ア Aの短歌で表現された良いことと悪いことが混在する気持ちを、「また」という並列性を含む言葉で表現しようとする思い。

イ Aの短歌で表現された世界観を維持しつつ俳句として成り立たせるために、年末を表す「日記買ふ」を用いようとする思い。

ウ Aの短歌で使われた「愛しき」という言葉を、次の年も継続していこうという前向きな行為で表現しようとする思い。

エ Aの短歌で三度使われた「日々」という言葉に含まれる葛藤した時間大切に思う気持ちと反復性を表現しようとする思い。

〔問3〕⁽²⁾ 男二人の呆然とした声が、またそろそろ。とあるが、この表現から読み取れる二人の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 和彦も航太も、卒業記念の歳時記を全く活用していないことにばつ悪さを感じながらも、見事な修辭に二人同時に感嘆の声が出た。

イ 河野女史の俳句の説明に少しでも反論しようと食いがついていた和彦と航太だったが、完璧な論理を示され納得し、歓声をあげた。

ウ 和彦の指摘への河野女史の返答は和彦と航太には理解しかなかったが、その理由を聞くうちに高度な修辭に同時に気付く、驚嘆の声をあげた。

エ 河野女史の説明に納得しきれない二人であったが、他の例を用いながら説明されることで句が理解できることに気付く、感動の声が出た。

〔問4〕⁽³⁾ 航太は感心する。とあるが、「航太」が「感心」したのはなぜか。

その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 俳句甲子園参加のメンバーから離脱しようとする部員たちの気持ちを、河野女史自身の俳句でつなぎとめて鼓舞することができたから。

イ 河野女史が、詠み直した自身の俳句で、意図的に距離を取ろうとしていた来島京の心をほぐし、メンバーに引き入れることができたから。

ウ 他の部員が俳句甲子園参加のためのメンバー集めで四苦八苦している中、河野女史自身の俳句の力だけで半ば強引に説得できたから。

エ 実力者で周囲に配慮ができないと思っていた河野女史が、他者への配慮を込めた俳句で、そこにいる人たちの気持ちをまとめ上げたから。

〔問5〕 航太という人物がこの文章にもたらしめている効果の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 航太の俳句に関する的確な質問を足掛かりにして、Bの句の説明に關する発言を、押し付けがましくなく読者に伝えられる効果。

イ 周りに目を配る航太の気付きによって、来島京の感情を細やかに描き出し、彼女の気持ちが正確に読者に伝わるようにする効果。

ウ 意図的に会話の流れや雰囲気になじまない発言をする航太がこの場面にいることで、一人の登場人物が話し続けることを防ぐ効果。

エ 航太の素朴な発言、感想や想像によって、Bの句の技巧的工夫や世界観を、俳句になじみがない読者にも自然な形で提示する効果。

〔問6〕 この本文中に使用されている表現の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 会話文中における「……」は、発言と発言の間に時間的な間隔があることだけを表現している。

イ 登場人物の心の内を表現している部分については全て「――」を用いて、会話文と区別している。

ウ 会話文中に「」を効果的に使用して発言の言い回しを明確にすることで、心情を表現しようとしている。

エ 会話文中に「！」や「？」を使うことによって、登場人物の発言に直接表れない心情を表現している。

次のA、Bの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

ことばは哲学の知を現前化させ現在化させるために不可欠のものであり、思考の肉体である。⁽¹⁾この考え方は、ことばは思考の衣装であるとする考え方に明らかにかけわりつつ、対立している。ことばは思考の衣装である、とは、精緻で厳密な論理によって普遍的に思考することをめざす論理分析の立場から、一人の代表者（^{*}ヴィトゲンシュタイン）によってうち出された主張である。この論理分析の立場というのは、専門用語や学問用語を生み出したのと同じく知の精緻化や厳密化という土壌の上に、論理的な言語批判としてあらわれてきたものだ。言語についてのつよい関心と鋭い洞察力をもつこの現代のすぐれた哲学者は、はじめには、急進的な論理分析の立場に立って、「すべての哲学は〔言語批判〕である」と断定した。この断定は「およそ語られうるものは、明らかに語られるものである。そして、論じえぬものについては沈黙しなくてはならない」という決然とした覚悟をもった考え方を背景とし、日常のことばを私たちの思考を欺くものとみなす考え方の前提の上に立っている。そして、このようなものとしてとらえられたことばによる思考に対しての批判と、ことば（日常言語）からの解放にもとづく思考の明晰化を以て、哲学の役割とみなしている。「哲学の目的は、思考を論理的に明晰化することである」といわれるゆえんである。

さて、この見地から、思考（思想）とは意味をもった命題にはかならないが、ことばは思考をありのままで示すものではない、といわれるのである。すなわち、ことばは思考を、変装させる。それゆえ、着物の外形から着物をきせられた思考の形を推定することはできない。それというのも、着物の外形は軀の形を他人に知らせるという目的ではなく、別

のことを目的としてつくられているからである、と。このように、論理分析の立場では、ことばは、軀である思考の単なる衣装であると考えている。たしかにことばは、軀の形を他人に知らせる目的でつくられてはいない。しかし、それは、ことばが単なる衣装であるためではなく、実はことばが思考を受肉させ、それに具体的なかたちを与える肉体だからである。思考を現前化させるものだからである。もっとも彼も、「日常言語は人間という有機体の一部であって、それに劣らず複雑である」といつている。

彼が日常のことばを厳密さを欠いたものとして退けたのは、それに対して無感覚であったからではなく、むしろ鋭い感覚と意識をもっていたからである。だからこそ、後年になって彼は、「論理学の透明な純粋性といったものは、私にとっては現実のことばの考察から生じたものではなく、一つの要求だった」とみずから述懐し、論理的言語への要求と現実のことばとの衝突に耐えられなくなつて、日常のことばに立ちかえることにもなる。こういつている。⁽²⁾ 私たちはなめらかな氷の上に迷いこんでいる。そこには摩擦がないから、すべての条件が或る意味では理想的なのだが、まさにそのために私たちは滑つて先へ進むことができない。私たちは歩くことを欲している。だからそのために摩擦が必要なのだ。ざらざらした大地へ立ち帰れ、と。ここに摩擦といわれ、ざらざらした大地といわれていることが、思考の肉体としてのことばに大きくつながっていることは明らかであろう。つまり、思考の肉体としての日常のことばへの着地を自分に命じたものだったのである。

ことばが思考の着物ではなくて、思考の肉体であるとは、私たちが思い、考える場合に概念と論理だけによるのではなく、イメージと想像力にもよるのだ、ということである。思考ということを日常生活の場面に引きもどしてかえりみるならば、これはあたりまえのことと見なされよう。たとえば、久しく会っていない友人に手紙を出したが、さっぱり返

事がこない。遠く離れていても電話がかけられないわけではないが、わざわざ電話をするのもおおげさだし、また返事をくれないのは相手になかそれなりの事情があるのではないか、いいたくないことがあるのではないか、などと考えて電話をかける気にもなれず、宙ぶらりんの落ちつかない気持^{きもち}で返信がくるのを待ち、相手のことや家族のことについて、私たちはいろいろと推理し、想像する。このまえ会ったときにはあんなに元氣だったし、仕事も家庭も順調にいつていたようだから、ただ忙しくて返事をくれないのかも知れない。忙しさにとりまぎれているだけかも知れない。いや、それならいいのだが、もしかするとなにか自分のことを怒っているのではなからうか。なにも恨まれることはないつもりだが、あの男はひがみっぽいところがあるし……、それともひよつとすると日本にいないのかな、等々といった具合にである。

このように、日常生活のなかでは、思い考えるところは、ああでもないこうでもないで推理し、想像することである。ところがひとたび理論的で学問的な思考をする段になると、私たちは一般に、少なくとも多くの場合に、イメージや想像力をできるだけ排除しようとしてきた。それというのも、イメージや想像力が感覚に根ざし、私たちを欺くもの、誤謬^{*こびり}へと導くものと考えられてきたからである。概念や論理の厳密さをそこなうものともつばら思われてきたからである。イメージよりも概念を、想像力よりも論理を強化していくこの方向は、端的には神話（あるいは空想）から科学へ、というかたちで示される。そして、このような移行行きは、一般に科学の立場からは、なんの疑いもなしに進歩と考えられてきた。たしかに科学の立場に立つて或る限られた範囲内で考えるならば、それは進歩としてとらえることもできるだろう。⁽³⁾しかし、その場合実は、私たちは科学そのものの思考の枠組あるいは価値観から神話を見、その価値観を逆に神話に投影したにすぎないのである。

神話から科学への移行行きは、むしろ、ことばのうちに結びついてい

たイメージと概念、想像力と論理のバランスがイメージの優位から概念の優位へ、想像力の優位から論理の優位へと移っていったこととしてこそとらえられるべきであろう。一般的な知の趨勢^{*すうせう}として神話的思考から科学的思考というかたちでとらえられる移行は、哲学の知のなかでは、イメージからイメージⅡ概念へ、そしてさらに概念へというかたちでとらえなおされる。

（中村雄二郎「哲学の現在」による）

B

学部生の書く哲学・倫理学の論文は、まず何らかの問いを立て、それに対する答え（および、その答えの根拠）を探究する、という手順を踏むのが一般的だ。このとき、読む側からすると、なぜそれを問うのかという大本のポイントが掴^{つか}めない場合がある。その問いに客観的な重要性があるかどうかは明確でなかったり、逆に、あまりにメジャーな問いであるがゆえに、それをなぜ今こうしたかたちで問うのか分からない、といった具合だ。

そうした場合、論文指導の最初にまずこの点を学生に尋ねると、学生本人のこれまでの経験が問いの基層にあるケースが多い。たとえば、高校時代にかくかくのことに悩んだとか、アルバイト中にしかじかの場面に遭遇したといった経験だ。それを聞いて腑^ふに落ち、論述の内容に入り込めるようになったとき、私は学生に対して、論文の冒頭において当該の経験に――書ける範囲で、あるいは、より一般化したかたちで――触れつつ、問いを自然に導くかたちにしてはどうか、と提案することもある。（さらに、そこからその問いの客観的な重要性を示す論述が必要な場合もあれば、問いが明確に示されれば、それだけで十分に重要性が分かる場合もある。それもケースバイケースだ。）

⁽⁴⁾すると、よく勉強している学生ほど、そういうことを書いていいん

ですか、と驚く。なぜ書いてはいけないかと思うのかと聞き返すと、いわゆる「論文・レポートの書き方」本やネット上のアドバイスによくそう書いてあるのだという。レポートは高校までの作文や読書感想文とは違いますから、個人的な経験に基づいて議論してはいけません。はじめからおわりまで、客観性ないし一般性のある論述を心掛けましょう、と。

確かに、たとえば物理学や数学の論文であれば、個人的な経験から議論を起こしていくことはありえないだろう。しかし繰り返すように、すべての論文がそうあるべきと決まっているわけではない。分野やテーマによっては、具体的な事例を起点としたり、具体的な事例を積み重ねたりするかたちで、一般的な結論へと向かっていく、という論述はいくらでもありうる。あらゆるケースで、個人的な経験や動機の記述は不要であるとか不適切であるなどということはないのだ。

これは、個々人がそれぞれ完全に自由なスタイルで、自分の印象や好みを書き散らかせばよい、と言っているのではない。段落の行頭は一字下げる、「です・ます」調ではなく「である」調で書く、引用文献の出典情報を統一的な仕方で明確に記す、一定のアウトラインに沿った論述を行う、最終的には一般的な論点を提示するかたちにもっていく、等々、一定の型に嵌^はまった文章を書く訓練を積むことはとても大事だ。これは言うまでもない。

しかし、短いレポートはともかくとして、卒業論文の執筆などは単なる練習ではなく、同時に本番でもある。本来なら、最後まで型通りのお約束や借り物の表現に振り回されるのではなく、自分自身で書いたと言えるもの——自分自身の言葉や思考だと言えるもの——を目指して試行錯誤されるべきものだ。（そして、その試行錯誤には、吟味の結果として型通りの表現を意識的に選び取るということも含まれる。）

規格化された形式や表現を押しつける杓子定規^{しやくしじょうぎ}な「作法」は、とき

に害悪となる。何も考えずにかたちだけそれっぽい文章をこしらえることよりも、自分で納得のいく、しつくりくる言葉を吟味することの方がよほど大事だ。少なくとも私は、学生たちの主観にも経験にも、そして表現にも、大いに関心がある。

（古田徹也「いつもの言葉を哲学する」による）

〔注〕 ヴィトゲンシュタイン——オーストリアの哲学者。

軀^{からだ}——からだ。身体。

誤謬^{ごびょう}——あやまり。まちがい。

趨勢^{すうせい}——物事の進み向かう様子。動向。なりゆき。

〔問1〕⁽¹⁾ この考え方は、ことばは思考の衣装であるとする考え方に明らか

にかかわりつつ、対立している。とあるが、「ことばは思考の衣装である」とはどのような意味であるとAの筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

A 日常的に使用していることばは、論理よりも感情を優先しているため、論理的思考を行う上で問題が多いという意味。

I イメージを重視する日常のことばは、論理的な思考をする上では必要ないものであり、使用するべきではないという意味。

ウ 日常のことばは、論理的厳密さを欠いたものであり、論理的思考そのものを見えにくくしてしまうものだという意味。

エ 日常のことばは、論理的思考を根底で支えている言語と衝突する関係にあり、考え方を曲解する原因になるという意味。

〔問2〕 私たちはなめらかな氷の上に迷いこんでいる。とあるが、この部

分においてAの筆者が述べようとしていることの説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 論理的言語による思考では、論理的厳密さを求めるがゆえにかえって感覚が鈍くなるということ。

イ 論理的言語においては、イメージと想像力が排除されており、考えの糸口をつかめないことがあるということ。

ウ 論理的言語を使用した時点でイメージや想像力は排除され、かえって飛躍した思考となり伝わらないということ。

エ 論理的言語は、イメージや想像力を排除するために、日常のことは使用しないようにしているということ。

〔問3〕⁽³⁾ しかし、その場合実は、私たちは科学そのものの思考の枠組あ

るいは価値観から神話を見、その価値観を逆に神話に投影したにすぎないのである。とあるが、Aの筆者が「逆に神話に投影したにすぎないのである」と述べたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア イメージよりも概念を、想像力よりも論理を働かせるほうが、あらゆる物事を正しく捉えられるから。

イ 世の中の物事を学問的に思考しようとする、神話に関してもイメージや想像力を排除すべきだから。

ウ 神話は日常生活とは別に扱うべきであり、概念や論理優位の学問的思考を用いた方がよいと考えられるから。

エ イメージや想像力を排除し、概念や論理を優先させて考えることこそが進歩だと考えてきたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ すると、よく勉強している学生ほど、そういうことを書いていい

んですか、と驚く。とあるが、Bの筆者がこのように述べたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 勉強熱心な学生ほど、様々な情報を自分で得て、レポートや論文は客観的に記述するべきだという書き方を学んでいるから。

イ 勉強熱心な学生ほど、学問的に考察するためには、自身の経験を一般化して書くべきだということを理解しているから。

ウ 勉強熱心な学生ほど、論理的・客観的に考えようとする傾向があり、主観的な経験を記述することにためらいがあるから。

エ 勉強熱心な学生ほど、高校までの学習に忠実であり、レポートや論文は客観的に記述するという書き方を教わっているから。

〔問5〕 次の会話は、文章A、Bを読んだ後の国語の授業の様子である。

先生と生徒の会話の中のX、Yにはそれぞれあてはまる表現を、Xは文章Aの語句を用いて六十字以上七十五字以内で書け。Yは百字以上百五十字以内で書け。なお、Yは二文以上になっても構わない。

先生…Bの文章の筆者はAの文章で述べる「ことばは思考の肉体である」と「ことばは思考の衣装である」という二つの考え方のうち、どちらの考え方に近いかを考え、理由を書くという課題を行います。グループで話し合って考えた上で、各自、解答を仕上げてみましょう。まず、「ことばは思考の肉体である」「ことばは思考の衣装である」という部分を解釈しましょう。次に文章Bの筆者が主張しようとしていることを解釈しましょう。その上で課題に取り組むと論理的な答えが導き出せますよ。では始めましょう。

生徒A…私たちのグループではまず、「ことばは思考の肉体である」「ことばは思考の衣装である」という部分の解釈からやってみようか。
「ことばは思考の肉体である」とはどういうことかな。

生徒イ…ひとまず書いてみようか。

(しばらくして)

生徒ウ…できたよ。Xと書いたけど、どうかな。

生徒ア…とてもよいと思う。「イメージ」とか「想像力」が、やはりポイントになりそうだね。

生徒イ…次は文章Bについて考えてみようか。

生徒ウ…二重傍線部は、文章Bの筆者の考え方が端的に示されているね。
生徒ア…さっき出てきた「イメージ」や「想像力」と、「主観」や「経験」

というのは何か共通点がありそうだね。

生徒イ…そうすると、Bの文章の筆者はAの文章で述べる「ことばは思考の衣装である」に近いのかな。「主観」っていうのは他の人にもどのように思われたいか考えることって感じがするし。

生徒ア…いやいや、違うよ。Bの文章の筆者の述べる「主観」や「経験」は、レポートを書くこうした根本の理由みたいなことだよ。だから、「ことばは思考の肉体である」の方が近いよ。

生徒イ…なるほど、言われてみればそうだね。

生徒ウ…今までの話で、何とかできそうだね。Bの文章の筆者の考えはAの文章で述べる「ことばは思考の肉体である」の方が近い理由を書いてみよう。

(しばらくして)

生徒ウ…できた。「Y」って書いたけど、どうかな。

生徒ア…なるほど、それが理由か。先生にも聞いてみよう。先生、ちょっといいですか。

先生…はい。非常によく書けています。Bの文章で述べられている「文章の書き方」に着目して書いたところが特にすばらしいと思います。

〔問6〕 文章A、Bについて述べたものとして最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 文章 A Bとも比喩表現を多用することで、抽象的でつかみどころのない考えを、哲学用語になじみのない一般の読者にも想像しやすくする効果をあげている。

イ 文章 A Bともに、特定の部分に傍点を付けることで、筆者がその言葉を本来の意味とは違う意味で使っていることを読者に分かりやすく伝える工夫をしている。

ウ 文章Aでは筆者以外の哲学者の主張をもとに、具体例をあげてその主張を補強して筆者の主張へと展開しているが、文章Bは筆者の疑問から考察が展開されている。

工 文章Aは、「日常のことば」を説明するために「神話」と「科学」を対比させているが、文章Bは対比関係を用いず、同一話題で「書き方」について説明している。

[illegible]

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

掲載承諾申請中（令和五年四月現在）